

街とその不確かな「音」

田中和也

1. はじめに：コンラッドの詩学、文学史（リアリズムとモダニズム）、視覚と聴覚

文学史においてコンラッドは、モダニズム文学の創始者のうちの一人だと評価される。彼の詩学に関しては、*The Nigger of the "Narcissus"* の序文がしばしば注目される。そこでは“My task which I am trying to achieve is, by the power of the written word, to make you hear, to make you feel—it is before all, to make you see.” (Preface 7) とあり、書き言葉によって読者に「見させる」ことが強調されている。ここからは、彼が愛読したディケンズやフローベールなどのリアリズム小説の残響がうかがえる。だが、コンラッド作品では、登場人物や読者が「見る」ということは、そう平易ではない。たとえば“*Heart of Darkness*”において、語り手のマーロウが悪魔的な人物であるクルツと初めて出会う際には、クルツの身長は“at least seven feet long”もあつたかのように見えたとある(106)。この非現実的な身長描写は、マーロウがクルツに抱く畏怖や闇夜での不安と響き合っている。読者にすれば、マーロウの主観的な体験や動揺を、書き言葉による仮想現実で体験させられており、ここにはリアリズム的な客観性志向からの裂け目が見出せる。そもそも、マーロウの友人によれば、マーロウの語りでは出来事の意味は“not inside like a kernel but outside”に存在する上に、その“outside”も“a glow brings out a haze, in the likeness of one of these misty halos” (45) のような茫漠とした光に包まれている。この漠然とした語彙からは、マーロウによる主観的な語りや外見の描写には、おのずと限界があることが例示されている。

しかし、このようにコンラッド作品において視覚表現が一筋縄ではいかないとすれば、他の感覚はどのように表象されてなおかついかにして機能しているのかという問題が出てくる。そこで本論では、コンラッド作品における聴覚表現に関して、彼の中期作品 *The Secret Agent* (1907) を考察する。

2. 中期政治小説 *The Secret Agent* (1907) における聴覚表象と共同体のあり方

The Secret Agent は、かまびすしい音に満ちている。主人公アドルフ・ヴァーロックが仕えるロシアらしき大使館の高官は、自然科学へのテロという不条理な行為について長舌をふるう。その爆破テロ未遂をヴァーロックが引き起こした後は、警察官たちが公益や職務のためではなくて、自己都合でひたすら語る。ヴァーロックのアナキスト仲間たちも、空疎な大義を延々と独白的に語り合う。さらにはロンドンの街の喧騒も描かれるが、それから離れた閑静な地区にヴァーロックの家がある。その静かな家において、一家がお互いに立ち入った話をしない。ゆえに、ヴァーロックの妻ウィニーが、夫ならびに知的障害がある弟スティーヴィーに対して、真摯な関心を寄せない。このため、ヴァーロックは義弟をけしかけて爆破テロを試みるが、テロは未遂に終わる。スティーヴィーが爆弾の轟音の下で四散して死ぬのは、一家の静謐さとは皮肉な対比をなしている。

この小説で最大の音は、やはりスティーヴィーが爆死する場面で起きていると考えられる。だが、デボラ・マクラウドが述べるように(122)、この爆破音は直接的には描かれていない。偶然現場近くにいた警官は、爆破音を感じることなく、ただ白光(“a heavy flash”)と衝撃(“The concussion”)だけを感じている(71)。一方で、ヴァーロックは確かに爆破音を現場近くで聞いているが、“the bang”と素っ気なく表現している(158)。この爆破音は、スティーヴィーが義兄への尊敬をこめて起こしたにもかかわらず、当のヴァーロックからは冷然と感じられて、警官というリスpekタブルな人からは音の認識自体をしてもらえていないのである。さらには、そもそもこの小説は、当の爆破テロの場面自体を直接は描いておらず(Warodell 127)、スティーヴィーが成した行為やその際の決死の爆音は、なおさら作品テキストの虚無的な空白に吸収されてしまっている。

爆破の場面ではスティーヴィーの出した「音」は全くの無為となったが、彼の誠実さは音声描写によって際立っており、ゆえになおさら上記の爆破テロ未遂の不条理を浮き彫りにする。小説の中盤において、スティーヴィーとウィニーの母は、子どもたちや義理の息子ヴァーロックの負担になるまいとして、養老院に移り住む。その道中で三人は、夜のロンドンにおいて、片手が義手である御者が操る、くたびれた馬に引かれた馬車に乗る。御者は貧弱な馬に幾度も鞭をふるい、くたびれた馬車は道中でガタガタと音をならす。だが御者は、家族を養うために馬につらく接するしかないのだと、スティーヴィーに説明する。スティーヴィーはそれを聞いて御者と馬に同情し、“Poor! Poor!”と吃音で話し、自分が辛いときに姉がしてくれたように、御者と馬と同衾して慰めたいとさえ願う。だが、スティーヴィーは実際には“reasonable”であって自身の願望が不可能だと自覚している。このようなスティーヴィーの健全で誠実な想いは、御者の心を動かす。御者はスティーヴィーたちと別れた後、いったんは馬車に乗ろうとするが、馬を鑑みて、荷台に乗らずに馬を引いて去っていく(129)。

このやり取りの前には、ステイーヴィーは馬のために走行中の馬車を一時降りるといふ、危険を冒す。その突飛な言動を前にしても、御者はステイーヴィーには「自立心や健全さがある」(“lacked not independence or sanity”)と見抜いていた(123)。いわば、ステイーヴィーの健全な「声」は、御者という別の真摯な人間の胸に確かなメッセージを届けて、ロンドンの片隅にささやかながらも誠実な余波を残している。

だがこの御者とのやり取りの一方で、ステイーヴィーの声は、共感性に欠ける人々のもとには届かない。いうなれば彼の声は、登場人物たちが実直で他者を傾聴できるのかどうかをあぶり出すという、リトマス試験紙の役割を果たしている。ステイーヴィーは、御者たち貧しい人々を苦境に追いやる社会について“Shame!”だと切実に訴える。だが、ウィニーは物事の奥底を考えるのを生来忌避することもあって、最愛の弟が示す“such depths of insight”を察しようとしなない。その結果、ステイーヴィーが“Bad world for poor people.”という言葉をややく紡いで声に出しても、宙に浮いてしまう(131-32)。この際にウィニーが弟に示す無関心は、彼女が夫の冷淡さを見抜けないことと連鎖反応を起こして、ついにはステイーヴィーは死ぬ羽目となる。

ステイーヴィーの死後に夫婦は家で再会し、その後この小説は二人のエゴイズムやすれ違いを描く。その際にも、音声表象が効果的に機能している。ヴァーロックは、妻が物理的に背を向けている中で、彼女に対して爆破テロ未遂の背景を説明して自己弁護しようとする。そのときには、彼の声は“The veiled sound”とそっけなく言及され、なおかつ“The waves of air of the proper length, propagated in accordance with correct mathematical formulas”のように、意味を脱色されて、単なる音波として物理学の観点から冷淡に描かれている(195)。夫の自己肥大した語りを聞き、ウィニーはとうとう彼を刺殺する。殺害に際しては、彼女は何か時計のような“a ticking sound”を耳にするが、そもそもこの部屋の時計に“audible”な音は無いはずだといふかしむ。それから彼女は音の源について延々と思考を巡らし、最終的には滴り音は“Dark drops”、つまり彼女が殺害した夫から流れる血液の音だとうやく気づき、“Blood!”と驚嘆する(198-99)。ウィニーの強烈な自己意識や明敏な音声感覚は、彼女には夫の殺害前後で時間の流れが不自然に緩やかだと感じられることと相まって、緊迫感を醸し出す。そもそもこの小説の発端がグリニッジ天文台という標準時間の象徴へのテロにあったことを思うと(Eyeington 123-25)、時間を一さらには弟と夫がいる家庭を一破壊したウィニーこそが、この作品で最大のテロリストだと解釈しうる。その後、彼女は夫のアナキスト仲間であるオシボンにお金をだまし取られ、船から入水自殺したということが示唆されている。聞かざる者同士だった夫婦は、ともに死亡するのである。

さらにはヴァーロック夫婦の死亡は、二人の周囲にも波紋を残す。これは特に、オシボンという、生前のステイーヴィーの言葉に耳を傾けなかった人物の描写において、顕著である。オシボンは確かに、ウィニーからお金をせしめるが、彼女らしき人が入水したらしいことが頭から離れず、その事件の新聞記事を捨てられずに携帯している。その記事は“An Impenetrable mystery...”といったジャーナリズムの定型句に満ちている。この文言は繰り返し彼の内的独白に登場し、紋切り型で血の通わない表現とリズムに、オシボンは取り憑かれてしまっている。彼の妄執が描かれる際には“his own brain pulsating to the rhythm of an impenetrable mystery”とあり、彼の脳の血管の脈動を読者に感じさせるような音声描写によって、彼の煩悶が描かれる。オシボンが困惑する一方で、彼がいる酒場では機械仕掛けのピアノが“cheekily”にワルツを奏でて、さらには“grumpy”になったかのように演奏を急に停止する(230-31)。非生物の機械に人間的な描写がされていることは、オシボンに取り憑く無機質なジャーナリズムの決まり文句と対比をなし、彼の混乱ぶりを明白にさせる。

以上のように、*The Secret Agent* においては、かまびすしい音声の表象は、ステイーヴィーや御者のような語る言葉をもたない人々の静けさと、対比されている。だが、ヴァーロック一家が破滅し、アナキストたちや政治家が迷走しつつも、ステイーヴィーが御者にあたえたささやかな余韻やそれゆえの希望は残るのである。※本発表は、JSPS 科研費 24K03729 の助成を受けている。

Works Cited

- Conrad, Joseph. “Heart of Darkness.” 1899. *Youth, Heart of Darkness, The End of the Tether*, edited by Owen Knowles, Cambridge UP, 2010, pp. 41-126.
- . Preface to *The Nigger of the Narcissus*. 1897. *The Nigger of the ‘Narcissus,’* edited by Allan H. Simmons, Cambridge UP, 2017, pp. 5-9.
- . *The Secret Agent: A Simple Tale*. 1907. Edited by Bruce Harkness and S. W. Reid, Cambridge UP, 1990.
- Eyeington, Mark. “‘Going for the First Meridian’: *The Secret Agent’s* Subversiveness.” *The Conradian*, vol. 29, no.1, 2004, pp. 119-26.
- McLeod, Deborah. “Disturbing the Silence; Sound Imagery in Conrad’s *The Secret Agent*.” *Journal of Modern Literature*, vol. 33, no. 1, Fall 2009, pp. 117-31.
- Warodell, Johan Adam. *Conrad’s Decentered Fiction*. Cambridge UP, 2022.